

労働運動の夜明に

——労働者状態論争と横山源之助

立花 雄一

はじめに

高野房太郎，片山潜そして横山源之助

労働者状態論争

『日本の下層社会』執筆へ

むすびに

はじめに

明治三十四（一九〇一）年に，わが国の労働運動史の古典とされる片山潜・西川光二郎の『日本の労働運動』が上梓されて以後，凡百の労働運動史が書かれてきた。けれども，『日本の下層社会』の著者横山源之助と労働運動との直接的関係を述べたものは皆無である。——横山源之助ほど，労働者階級に執着したものはなかったのに。いや，待て，しばしである。ここに一篇，平野義太郎「労働運動の序幕—横山源之助・片山潜を通じて見たる—」（『経済評論』一九三六年一月，『日本資本主義の構造』一九四八年）を除いては，といい替えるべきか。

序幕期労働運動が潰え去った直後に刊行された『日本の労働運動』は，実に詳細であり，文字通りのその期の総決算備忘録である。そして，その書き手が当時運動の指導者であり，また後年ロシア革命後はコミンテルン常任幹部となった片山潜であったから，その信憑性は絶大である。したがって，戦前戦後に書かれた社会・労働運動史は，序幕期労働運動に関するかぎり，この書に依拠してきた。しかしながら，その後の諸運動史が片山潜の視点以外を持たなかったのはやはり怠慢であろう。視角を変えれば，別の物が見えてくるのだから。ところで，横山源之助の『日本の下層社会』は，明治三十（一八九七）年に開幕した序幕期労働運動が二年後最高潮に達した，明治三十二（一八九九）年に刊行されるのである。そこで，横山源之助と労働運動と関わりがあったか否か，『日本の労働運動』の中にそれをたずねてみると，序幕期労働運動の中央機関誌『労働世界』の「重なる寄書家」のくだりに，横山源之助の名が一箇所見えるのみである。また労働運動の周縁団体であった貧民研究会にいたっては，「本郷真治郎，片淵琢，松原岩五郎，山室軍平，布川静淵，松村介石，片山潜，高野房太郎，安達憲忠等の如き各種の人」を集めたとありながら，会の主宰者であった横山源之助の名が何故か書かれてない。このように，『日本の労働運動』の中には他にどこを探

しても、不思議なことに横山源之助の名はないのである。だが、そのとき横山源之助ほど、全身全魂をこめてその渦中に生きていた者はなかったのに。これはどうしたわけであろう。そこに、わたくしはなにか故意を感じないわけにいかない。あるいは、ある種の選別を。そこには、たとえば社会民主党の結成（同明治三十四年即禁止）に参加した者とそうでない者とがあるように、あるいはその頃に顕在化した右派＝労資協調派と左派＝社会主義派の対立が隠されているように。——そのことを、いま詳述するつもりはないが。そのこのところをつきぬけているのが、平野義太郎の「労働運動の序幕—横山源之助・片山潜を通じて見たる—」である。平野義太郎論文は高野房太郎、横山源之助、片山潜の三人を挙げ、労働運動の序幕期における、それぞれの位置、役割を大胆に図示している。横山源之助を中に据え、高野房太郎を低く、片山潜を高く見過ぎた偏りがあるけれども。だが、わが国の労働運動の幕がこの三人によってひらかれた構図を明瞭にいい当てていただろう。平野義太郎の見解は凡百の労働運動史の中でひとり独自のが、正鵠を射た先見的意味で評価されていい。宜なるかな、高野房太郎、片山潜、横山源之助の三人がわが国の労働運動の生みの親であり、三人の鼎立によって、労働運動が始動し、展開されたことは紛れもない。なにはともあれ、労働運動史上に横山源之助の名がないのは、はじめは『日本の労働運動』のその欠落に由来すると愚考される。そこで、その欠落部分の空白を横山源之助側の資料から補ってみたいとおもう。つまり、片山潜的視点のみによるのではなく、別の視点をくわえることによって、歴史はより立体的になり、より豊潤になるだろうから。しかしながら、ここでは、かかわりのすべてを点検する余裕はない。したがって、いまは労働運動と横山源之助との関わりのはじめと、史上に忘れられているが、横山源之助が矢面に立ってたたかった労働者状態論争について、簡単に述べるにとどめる。

高野房太郎、片山潜そして横山源之助

労働運動の生みの親高野房太郎、育ての親片山潜と横山源之助。この三人がどのようにして鼎立することになるか。まず、そのことについて触れておきたい。

ここに、それぞれ三人につながる、興味深い資料の断片が二、三ある。それから見て行くことになる。一つは明治三十（一八九七）年、わが国の労働運動がまさに幕を開けようとしていたとき、丁度横山源之助が『毎日新聞』に連載していた「大坂工場めぐり」中の其廿二「大阪盛業株式会社」（十月十九日）であり、一つはやはり同時期に重なる、片山潜の著『労働者之良友喇撒伝』（同年十一月十五日、喇撒は、人名ラザル〈現在はラサール〉の当て字—筆者注記）であり、いま一つはそれから七年後、序幕期労働運動が潰え去った後の、日露戦争の開戦も間もない明治三十七（一九〇四）年三月十二日清国山東省青島で客死した高野房太郎のために、友人横山源之助が同年五月四日と九日二回に分けて『毎日新聞』に載せた長文の追悼記「労働運動率先者の死」である。この三つの断片をつなげることによって、三人がどのようにして肩をくみあうことになったか、そしてさらには運動が潰えた後、どのようであったかが手にとるように見えてくるだろう。

まず、明治三十七年の「労働運動率先者の死」から見る。それは、いま、時代の寵児となっている平民社社会主義とその反戦運動の蔭で、まったく忘れられている一率先者の死に、満腔の哀悼を表しながら、労働運動開始時をかえりみた、当時只一つの追想記であったろう。苟も労働運動生み

の親の死に報いるにたる記は他に一片もなかったから。さて、横山源之助は、価値多きと叫んでいる。その追悼記の巻頭で、こう叫んでいる。

「友人高野房太郎君は、支那山東省膠洲湾に於て、肝臓病を以て死せり。／＼刻下我国は、帝國主義発展の絶頂に在り、此時に於て、我高野君の死の如きは、一兵卒の死よりも、世人の重んずる所と為らず、然れども歐洲諸国の例を以てすれば、戦争が常に其結果に於て、労働問題を喚起せるを思へば、余輩は今日君の死を聞いて、無限の感慨なき能はざるなり」と。そして明治二十三（一八九〇）年北米にありながら、高野房太郎が数人の友人らと共に職工義友会を組織し、明治二十九（一八九六）年歐洲各地を巡視して帰朝。横浜の英字新聞記者となつてから、翌三十年四月「職工諸君に寄す」の文書を労働者に配布するなどし、労働運動の生みの親になつて行くあらましを、こう述べた。「七月、「労働は神聖なり、団結は勢力なり」の二言を信条とせる労働組合期成会を創立して、労働運動は一步を進め、同十二月、千百八十四名の鉄工を翕合して、鉄工組合を組織せるなり」と。そして次に「余の君を知りたるは、実に此の労働運動醗酵の時と為す」といい、高野房太郎、片山潜、そして横山源之助の三人が一堂に会した歴史的な様子について、次のように書き記している。「(当時、余、関西地方の工場視察を終りて、帰京、偶々片山氏の招〔き〕に応じ、晚餐を共にせる際、^ア蘭を排して、君の来り会せるを以て初めと為す、ア、今や片山氏は、北米に在り、君は長へに去つて天上に逝けり、茫として夢の如し)」と。

このように、横山源之助が高野房太郎、片山潜の招待をうけ、三人が一堂に会しているのである。それなら、所謂「余、関西地方の工場視察を終りて、帰京」、あるいは「労働運動醗酵の時」とは、具体的には何時のことであつたか。

さて、ここで、それを追求する前に、明治三十（一八九七）年は労働運動が開始される記念的な年であるから、もう少し順を追つてみる。すなわち、同年四月六日、前年に帰朝した高野房太郎ら職工義友会のメンバーが演説会を開き、労働組合の結成を呼び掛ける訴え「職工諸君に寄す」を配布。六月二十五日、高野房太郎らは片山潜、佐久間貞一らを誘い、神田美土代町青年会館で最始の労働問題演説会を開催、聴衆無慮千二百余名という。七月四日、労働組合期成会が発足。そして、ついに十二月一日、最始の労働組合である鉄工組合が東京砲兵工廠、石川島造船所等の労働者を中心にして結成され、同日労働組合期成会と鉄工組合の共同機関誌『労働世界』が発行され、ここに労働運動が事実上開幕する。

このように、東都で風雲急を告げ、時代の齒車が大きく廻転しようとしていたとき、横山源之助はどうしていたか。果せる哉、もう一人の風雲児横山源之助は、なんとそのとき、日本の産業革命の真相を見極めるべく、北陸に、関西に長駆中だったのである。横山源之助以外にはできない、まるで歴史的使命を帯びていたかのように。すなわち、昨明治二十九（一八九六）年三～五月、日本一の生産高を誇る足利・桐生等両毛地方機業・労働事情調査を成し遂げた後、やはり時代変革の波に洗われている、代表的農業国である故郷富山県下の小作人事情調査のため、出京したのが同年八月。その調査終了後も、漁民問題等の地方下層社会調査継続を理由にして滞在し続けた富山県から、関西地方工場・労働事情調査に向け旅立ったのが、翌三十（一八九七）年五月。六～七月、途次である北陸路の石川・福井両県下の機業その他地場産業調査等を終つて、ようやく敷設されたばかりの鉄道を汽車で、福井からいよいよ目的地大阪に入ったのが七月後半。そして酷暑の中各種の工

場を巡視し、速報「大坂工場めぐり」を連日『毎日新聞』に送った。その廿六回に及んだ速報を終るに関し、次のような記がある。「余の大阪に出でたるは生糸と労働者の研究に在れば工場の中最も注意したりしは紡績会社なり今まで各工業の現状を記し多少労働者の事を記したるが如きは余に於ては寧ろ工場めぐりの附けたりに属す、今日大阪府下に十八の紡績会社ありて余の見ざりしは〔略〕の五ヶ処にして他は悉く一回若くは二回訪ふて工場或は寄宿舎を見或は事務員に会して労働者の事を聞けり」（「大坂工場めぐり」其廿六「平野紡績会社」）と。酷暑にかかわらず、横山源之助の調査がどれほど徹底的であったかわかるだろう。工場まわりの他に、大阪、神戸の貧民窟、社会福祉施設探訪、水産博覧会巡覧等々も。所謂「余、関西地方の工場視察を終りて、帰京」とは、そういうことであった。それなら、その「帰京」の時とは何日であったかであるが、「大坂工場めぐり」の「大阪盛業株式会社」（其廿二同年十月十九日）を見ると、その文頭に、こうある。「余本日をして帰京す、大阪工場めぐり尚ほ遺れるは多しと雖も大略して今ま四五回に止め本稿を完結とせん、不日阪神地方労働者の現状でふ題目の下に読者に見ゆべし、目下職工問題世に喧し、江湖の一顧を得ば幸甚し（十六日）」と。とすると、この記事の新聞掲載日が十月十九日であったから、関西地方工場視察終了の日とは、文末にある（十六日）、すなわち十月十六日であったことになる。それ故、「帰京」の日は同十月十六日か、翌十七日であったろう。これは、横山源之助にとって、昨年八月に出京して以来、実に一年二月振りの還京、帰社であった。そして、その間、富山県下での小作人事情を中心とした下層調査と、北陸路石川・福井を含む、関西での工場・労働事情の二大調査を完遂した。さきの出京前に行なった、第一次の両毛地方機業・労働調査と合わせれば、日本産業革命下における三大調査を完了したことになる。かくして、あたかも東都で労働運動の歯車がついに廻り始めようとしたとき、横山源之助は帰京した。

さて、ここで、もう一つの資料である、明治三十（一八九七）年十一月十五日発行の片山潜『労働者之良友喇撒伝』を見なければならぬ。それを開くと、そこにはなんとまるで詠えたように、高野房太郎、横山源之助、片山潜の三人の序があるではないか。すなわち、三人の立役者が、この書で轡を並べて勢揃いをし、これから旬日をおかずして高らかに呱呱の声をあげんとする日本の労働運動の誕生を共に迎えんとしていた、歴史的様子がここによくあらわれているだろう。序に一言加えれば、その横山源之助の「序」の冒頭第一声が、次のような、全国の労働者への呼び掛けであったことは、はなはだ意味深い。労働運動開幕半月前の言葉だ。すなわち、「数十万の労働者諸君／米価は石十五円に近づき空前の高直を現はし来れり、近状如何。此頃頻りに同盟罷工の報あり、或は「細民暴動」の文字を新聞紙に見ること多し、余は此等の報を聞く毎に如何にして消らせるやを案じて卿等の近状を想ふ」といい、そして「労働は神聖なり、卿等は社会に対して労働者の社会発達の上に尊重せらるべきことを主張する自然の権利あり、而して其の自然に有する権利を保持するに自ら省みて之に應ずる手段を求め、正当の方法を取りて生活を向上せしむることを為さざるべからず」といっている。そして、「序」の末尾を見ると、「明治三十年十月三十一日横山源之助識」とある。とすると、横山源之助が着京したのが、十月十六日か十七日だから、十月二十日頃三人が会見。十月三十一日同書の「序」執筆。十一月十五日同書出版。十二月一日労働運動の開幕。こういった運びが図示できるだろうか。

このように、日本の労働運動はその夜明に、三人の立役者——労働組合の結成を呼び掛け、組織

した、労働運動の生みの親高野房太郎と、『労働世界』の発行責任者となり、労働運動の中心的育ての親となる片山潜と、そして、労働運動開幕期の最高の知的果実となる『日本の下層社会』の著者横山源之助とが、顔を揃えていたのである。

労働者状態論争

日清戦争中に、島田三郎社長の『毎日新聞』記者となり、下層社会探訪に、戦後は産業革命下の労働事情の報告に専念したのは、ひたすら社会・労働問題の解決のためであったから、労働者らの自立的人間解放運動である労働運動が起きるとなれば、直ちにそこへとびこんで行くのは自明だったのである。したがって、横山源之助が帰京早々、そこ東都で労働運動の開始を準備中であった高野房太郎、片山潜にすぐに迎えられ、指導者の一人として運動に加わって行く次第は、前章で述べた。

さて、次は横山源之助の運動への具体的かかわりについて、述べねばならぬ段階である。しかしながら、今ここで、そのすべてについて筆を割くゆとりはない。それ故に、その一端として、労働運動開幕早々であったためか、史上に忘れられている、したがって名称すらもない、労働者状態論争とでもいうべきものがあつたことについて、述べるにとどめる。それは横山源之助が労働運動に深くかかわっていた事実を何よりも鮮烈に語ることになるだろう。

日清戦争後の、明治三十（一八九七）年十二月一日、千余の鉄工組合員の参集をもって開幕をした労働運動が半年後には倍増二千五百の労働者を数え、なお旭日の勢いであつた初期。早くも、戦争後労賃の高騰や、土木工事その他職業の増加のため、労働者の生活は楽になっているといふ出資者が現れた。しかもそういい出した者とは、石川安次郎（半山）という操觚界の大物であつたから、そういう言を放っておくならば、だから労働者の賃上げは勿論のこと、労働運動すらも必要ないといふ、労働組合不要論にもなりかねない危険があつた。それ故労働戦線側から総スカンをくらった、けっして小さくはない事件があつたのである。しかも、その抗争は明治三十一（一八九八）年四月から、翌年春四月まで一年余続き、その間には、労働者家庭の家計状態を問う、その種の嚆矢ともなる実証的なアンケートまでが募られた。そのとき、終始論争の矢面に立って労働戦線防衛のためにたつたのは、高野房太郎でも、片山潜でもなく、横山源之助であつた。それは労働階級を捲き込んだ、史上稀有な対外論争であつた意味でも、記憶されていい。

さて、労働者状態論争とは、どんなことか。労働組合期成会傘下に貧民研究会があり、その主宰者が横山源之助でありながら、明治三十四（一九〇一）年発行の片山潜・西川光二郎『日本の労働運動』中の貧民研究会の条には、何故か横山源之助の名がないことは、さきに触れた。貧民研究会は、労働運動が明治三十（一八九七）年十二月一日鉄工組合の結成によって実際に始動した四ヶ月後、翌三十一（一八九八）年三月から準備され、四月二十七日第一回貧民研究会を開いている。労働者状態論争とは、その第一回貧民研究会席上で起きたのがはじまりである。

その経緯は、こうである。『労働世界』第十二号（明治三十一年五月十五日）雑報記事の一つにいう。「●貧民研究会第一会 本社の片山潜及び横山源之助両氏の発起にて昨月廿七日午後七時よりきんぐすれい館にて貧民研究会第一会開かれたり出席者十六名片淵琢氏の静岡地方を旅行して感せしとて都会と地方細民比較談あり報知新聞記者たる井上慶吉氏は新網貧民の状況を語り甲談じ乙

語り端なく、物価の騰貴は細民に幾何^{いくばく}の影響ありや」の問題に入り或は戦後官民事業の膨脹は貧民に職業を与へ賃金をあげたれば今日物価の暴騰は細民の生活に何等の影響なしと説ける石川安次郎氏の如きあり高野房太郎氏は影響ある論者^{いちにん}の一人として米穀取引所の存在^{あるの}は人為的に米価を高むる者にあらざるか、余は取引所を睨みつゝありと気焰を吐き衆議紛々たりしが結局影響ありと決し井上氏提出の貧民救助所設置の議を宿題として散会せしは十時過ぎなりき……」と。

すなわち、労働者状態論争は、明治三十一（一八九八）年四月二十七日、片山潜の神田キングスレイ館で開かれた貧民研究会第一回会合席上で始まり、元『信濃日報』社長、昨年十二月まで『中央新聞』経済部長であった石川安次郎（半山）がその火付け役であったという。そして、それはその夜の席上では、一応「結局影響ありと決し」、一旦は治まったかのようにみえた。ところが、その貧民研究会席上列座者みんなから総反撃をくらった形になった石川半山は、それでは治まらず、年来の友人島田三郎が社長であった『毎日新聞』に公開状を載せたのである。会の主宰者横山源之助がその『毎日新聞』の社会部記者であることを知ってか、知らずか。わずか数日後、すなわち同年五月四日の『毎日新聞』紙上に、「貧民の実情」と題してあるのがそれである。その冒頭で、石川半山はこういいきっている。

「貧民問題は数年前より著るしく朝野の間に注意せらるゝに至れり是れ最も賀すべき現象なり而して戦争後物価の暴騰は特に社会をして貧民に注意せしめ此物価の暴騰に依りて貧民も如何に其困難の程度を増したる乎は社会一般の憂ふる所なり然れども余の見る所を以てすれば今日の貧民は戦争前の貧民よりも其生活上大にラクを感ぜるものゝ如し」と。続いていうに、「戦争中及び戦後の経営は未曾有の幸福を労働者に与へたり曰く台湾の経営曰く北海道の開拓曰く鉄道曰く紡績曰く葉煙草専売倉庫の建築曰く船舶の増加曰く道路改修曰く兵営砲台の増築其他百般民間の事業勃興は官府の施設と相俟ちて労働者の需用を過大に増加し其賃銀を暴騰し其休息時間を減少し労働者は知らず識らざるの間に大なる利益を得たり今日は尚其需用の永続せる時代也労働者欠乏の嘆声は到る処に之を聞くべし」と。そして、さらに言葉を重ねて、一昨年から本年まで、「長野山梨静岡神奈川群馬埼玉栃木」、「埼玉長野新潟富山石川福井京都大阪兵庫岡山」、「群馬埼玉栃木茨城長野」の各県を巡遊調査した結果、「各地の労働者は其生活に於て皆戦争前よりもラクを感ぜるを言ひ各地共に貧民の減少を感ぜり」と述べた。

前にもいったように、石川安次郎半山は一流の操縦者、経済学者であり、かつ加えて幸徳秋水、中村太八郎らと社会問題研究会をつくっていた、いわば社会問題に関するかぎり斯界屈指の権威であったのだ。その人が該博な知識と広範、綿密な踏査に基づくと、堂々以上のような論陣を張ったのである。強いていうならば、その論旨は労働運動がよってくる根拠を全面否定しかねないものであった。それが研究会席上のみならず、次いで、このように新聞にまで発表されたのである。それは労働陣営との全面戦争になることは必至であった。そこで、すぐさま反撃に立ち上ったのは、一つは、前にも述べたように、喧嘩をふっかけられた形となり、当然その売られた喧嘩を継続せざるをえなくなった貧民研究会であり、一つは、労働陣営側の機関誌である『労働世界』（半月刊誌）であり、もう一つは、労働問題の第一人者として労働陣営側にあった横山源之助に他ならない。こういう場合のためにこそ、横山源之助の運動への参加があったようなものだから。

さて、この三者が中となって、石川安次郎半山へ猛反撃を加えることになる。それは、次のよう

な順序をたどる。まず立ち上がったのは、横山源之助であった。石川安次郎が「貧民の実情」を『毎日新聞』に載せた三日後、『毎日』社中にいた横山源之助が、逸早く「石川安次郎君に質す」（明治三十一年五月七日）と題した反駁文を同紙上に載せたのである。横山源之助は冒頭で、こういった。「昨二十七日貧民研究会に足下も来会ありたりしを後にて片山君より聞き初めて知りぬ失礼せりあの時物価の騰貴と細民に就き経済学上の原則を説いて今日の細民は生活に困つて居らぬと称へたる足下の如き論者ありしを見て余は窃に案外を覚えたるなり今また毎日新聞を藉りて／今日の貧民は戦争前の貧民よりも其の生活上大にラクを感じ／と傲し更に「貧民の実情を説いて貧民に注意する人々」に控告す……」と。

横山源之助は、まず冒頭で、このようにやんわりと挨拶を交しておいて、一転して、以下のような表を掲げたのである。

労銀米価比較表

年次	労 銀		白米小売相場	
	労銀	割合	相場	割合
二十六年一月	〇, 四〇五	一〇〇	九, 四七九	一〇〇
二十七年一月	〇, 四二五	一〇五	一〇, 二〇四	一〇八
二十八年一月	〇, 四七六	一一八	一一, 四九四	一二一
二十九年一月	〇, 五〇二	一二四	一二, 〇四九	一二七
三十年一月	〇, 五四二	一三四	一三, 八九二	一四七
三十年十二月	〇, 六四〇	一五九	一八, 九八六	二〇〇
三十一年一月	〇, 五九六	一四七	一八, 二六五	一九三

すなわち、戦前戦後の明治二十六（一八九三）年から三十一（一八九八）年までの東京府下の職人労銀米価比較表を掲げ、こう、言葉を添えた。「二十六年一月の平均賃銀は四十銭五厘にして白米小売相場の平均は九円四十七銭九厘一日の購買力は四升二合七勺二六余なるに三十一年一月の労銀平均は五十九銭六厘にして白米小売相場は十八円二十六銭五厘即ち三升二合六勺三一弱に相当し其の購買力の減ぜること正に一升〇〇九五なり石川君足下購買力の減ぜること斯くの如くにして尚ほ労働者の生活は大にラクなるを得べきや」（後『日本の下層社会』第二編「職人社会」第七「全国職人の平均賃銀」）と。

このような横山源之助の隙のない、統計的、科学的反論に続いて、次に、労働組合期成会と鉄工組合の共同機関誌であり、一日、十五日発行予定の半月刊誌『労働世界』が反撃に出た。事は最初四月二十七日第一回貧民研究会席上で起き、五月四日石川安次郎「貧民の実情」を『毎日新聞』に発表。五月七日横山源之助駁論「石川安次郎君に質す」を同紙に掲載。そして五月十五日『労働世界』第十二号が反撃に起つ。以後、『労働世界』の反論は、第十二号から第十五号七月一日辺まで続いた。とくに、第十二～十四号辺が盛りであり、第十二、十三号などは全面を挙げて労働者状態論争特集号であるようであった。

第十二号を見ると、二題の社説「米価騰貴と労働者」、「日本の貧民問題」、時評、雑報欄の大部分の記事はこの問題であった。「戦後事業の膨脹と共に物価は暴騰し居るに拘らず生活はラクになれりといふ者あれど、個は必竟貧民の実情を知らざる者の言のみ」（「日本の貧民問題」）とあるなど、物価騰貴、米価騰貴問題、あるいは小官吏薄給者、手伝い、下流職工、漁民、小作人等々の生

活困窮問題に言及している記事ばかりである。六月一日発行の第十三号も、第十二号に劣らず、矛を並べている。論説「労働者の情態と戦後の影響」、雑報の各項等々。たとえば、論説「労働者の情態と戦後の影響」の文頭に、こういう語がある。「労働者の情態と戦後の影響に就ては世の中に間違つた考が行はれて居る、戦争此来政府の事業も民間の事業も大に増へて来て職業が増すと同時に賃銀も増して一般に労働者の懐に入る金が多くなつたから戦後の影響は労働者に取ては大に幸福であると斯様に云ふのが世の中の定論である様なり是れは少し御まけの過ぎた議論ではなからうかと思はれる」と。また、こんな投書がある。「労働世界記者足下 此頃の米価騰貴は我々職工に採りては不尠困難の種に候特に三四十銭の工銀を受け居る者は如何に致候も暮しを附け行く術無之候……」。

かくするうち、ついに労働者家庭家計調査ともいうべき、劃期的なアンケート調査が提起されたのは、『労働世界』第十三号附録に於てであった。ここに到って、労働者状態論争は労働者家庭をも巻き込み、労働者階級の全体が参加するという事態につきすすむ。そういう全労働者との連帯の中で、この論争はあぶくのような一時的な論争に終らず、数ヶ月後の回収期間を見込んだ、おおきな展望と不退転の決意の下に、それほどのつよい危機感をもってたたかわれることになる。石川安次郎半山に代表される、第十三号論説のいう「世の中の定論」とたたかうために。その『労働世界』第十三号附録アンケートにつき、次号『労働世界』第十四号（明治三十一年六月十五日）は以下のように述べた。「●労働世界が十三号の附録として労働者一家の収入支出の決算表を、発刊して広く労働者に其活計の実情を報道せられんことを依頼たるは全く労働者の為めに一大計画する所あるなり或者は云ふ机上の空論を為して戦後の労働者は安楽に暮せり彼等は充分満足せり又何ぞ労働問題の必要あらんやと労働世界は労働者の困難なるを熟知するも彼の書物を以て理屈をこねつけ労働者に反対するものを屈服せん為めに実際の状態を揚げて以て労働者の為めに計らんとの真情より出でたるなり」と。

このように、労働陣営側は労働者家計アンケートを公募し、その回収を待つという長期戦を辞さなかったのである。そこには、不退転の覚悟と厳しい危機感とが見えるではないか。そして、「何ぞ労働問題の必要あらんや」と、労働運動不要論に直結して行く石川安次郎論に代表される「世の中の定論」に対して、労働陣営側がその定論を打ち破るためには、ただ議論に頼るのみではなく、その生活実態＝労働者状態の厳格なる検証をもってするという、もっとも揺ぎないたたかい方へとつき進んで行く。このときに、最も低いものたちが、よもやこのような戦法に打って出て来ようとは誰が予測できただろうか。次いで、七月一日発行の第十五号は、「物価下落と労働者」と題した、さらに議論をすすめた、かなり長文の論文を載せている。かくして、『労働世界』誌上を埋めつくしたこのときの論争関連記事や、家計アンケートの案出は、『労働世界』第一号から企画編集に参加していた横山源之助がみずから筆をとったものであることは否定すべくもない。そして論争はこのときからアンケートの回収を待つという後段階へ移るのである。すなわち、わが国最初の労働者状態アンケートがいかなるものであったか、また、その回収結果がどうであったか——そして、他に論争の後段階の経緯とでもいふべきものを見る前に、横山源之助が主宰しながら、そもその論争の発火点となった貧民研究会のその後の成り行きについて、見ておこう。

労働者状態論争は、四月二十七日第一回貧民研究会席上石川安次郎半山の口火によって起き、そ

れがその場でただちに総スカンをくらったことは前に述べた。ところが、それでは治まらぬ石川安次郎が、それから一週間後の五月四日「貧民の実情」を『毎日新聞』に載せ、堂々と再説した。それは貧民研究会への再挑戦にひとしかったから、第二回以降の貧民研究会の議論はすべてこの問題に集中された。すなわち、労働者の生活がラクになったか、否かである。

貧民研究会の創設責任者であった横山源之助はこの会のために早くから、資料を準備していたらしく、第一回貧民研究会の模様を報じた『労働世界』第十二号（明治三十一年五月十五日）に、早くも郷里から取り寄せた資料らしい「●地方貧民情況一斑」が載っている。横山源之助は反撃材料として、さっそくそれを活用した。その「●地方貧民情況一斑」の冒頭に、「本月七日、在富山県魚津地方の一知人より細民現状の報告を得たり、要を摘みて読者の参考に供ふ」とあるように。それは三項に分れている。一つは「○一種の貧民救助」と題した漁民生活状況報告、この春即ち明治三十一年四月魚津であった米騒動とその救助顛末について。一つは「○物価騰貴の一影響」と小題した、無尽講、頼母子講、トリノケ講流行の町場の報告。そして、一つは「○小作人の生活現状」である。それは労働者（＝貧民）状態論争の別域の切込みである。そこに、「四五反歩を耕作しつゝある小作人は例年田植頃より収穫頃まで困るものに候が本年は物価の騰貴と浮塵子虫の為に一層弱わり居候様子にて農具等を質入れして食料となし或は地主に縋りて金を借るもあり南京米の村落に需用あるを見ても知らるべく候村税未納八九ヶ月に及び村役場は吏員教員の給料仕払に困ることマ、有之よしに候、北海道移住者も此頃頻りに増加し相当の財産を有ちて渡航する者百中の十他は悉く糊口に困しく祖先以来の土地を離れて遙々北海道に赴く者に候今ま左に本郡役所に就き調査せる結果を見れば

三十年中北海移住者

戸数二百五十戸 千人

三十一年一月より四月まで

戸数三百七十三戸 千三百三十二人

小作人の困難せるに反して中以上の農民は腹鼓して太平を謡ひ居候余裕ある米は坐して高価に売り細民の苦を夢にだも知らず、三月頃までは寺詣り鎮守の御祭などに出掛けて栄華に暮し居候ひし畳屋建具職呉服屋の花主は村落に多く候」とある。そして、これは『日本の下層社会』第五編「小作人生活事情」第七「出稼、移住」に、以下のコメント付で転載された。「参考 本年五月余輩同志の間に成れる貧民研究会に於て、物価の騰貴と細民の関係は研究問題となり、余は物価の騰貴が小作人に与へつゝある影響を知らんと欲して、「四五反を耕作しつゝある小作人の生活現状如何」を郷地の一知人に質せり、暫らくして得たる答書は実に左の如きものなりき」と。

貧民研究会は、このような研究資料を各自持ち寄って進行して行くが、第二回、第三回研究会の模様はどうであったか。同年六月一日発行の『労働世界』第十三号を見ると、五月十八日行われた第二回貧民研究会につき、こういっている。「●貧民研究会の第二回 は予報の如く去月十八日夜開会され雨天にて来会者は少数なりしも大に益する所あり当夜は其分類を区別して実地取調べの方法を定め各自其担任を定めて散会せり次回は本月中旬に開き各自よりの報告を参照して研究する都合にて今日の処では貧民は大に困り居れりと云ふ説を慥めるもの無し」と。この第二回研究会は、第十二号雑報によれば「□□□□氏演説し」すなわち横山源之助が報告を担当し、前記した「地

方貧民情況一斑」を報告したとおもわれる。因みに、第二回に「其分類を区別して実地取調べの方法を定め各自其担任を定め」たとあるのは、六月十五日発行『労働世界』第十四号雑報記事によれば、「原、植松、副島諸氏が貧民と犯罪、養育院、質屋、貯蓄銀行、居酒屋等の現状報告井上氏の貧民救助所設置立案等」であった。そして、六月十五日行われた第三回貧民研究会の概要は、七月一日発行『労働世界』第十五号に、こう報じられてある。

●貧民研究会 第三回貧民研究会は去月十五日神田青年会に於て開会し細民の情況に就き各調査委員の報告あり細民の目下困難に陥れると云ふ事実を左の数点に於て見認め得たり

- 一、細民質屋の締切
- 二、濁酒屋の繁忙
- 三、貯金額の減少
- 四、労働者の賃銀と物価騰貴との変動の割合
- 五、地方の事情

是なり、就中重要な事実二三の聞き得たる者を挙げれば左の如し

▲細民の典物を受取る質屋に多く締切りとなりて一切質物を受取らず

▲細民は大に貯金の必要を感じたれども貯金器の需要多くなりたれども其内に入るべき金額は減少したりと云ふ事実あり

▲地方の小官吏は目下非常の困難にて（以下略）

このように、貧民研究会は第二回、第三回と回を重ねて、六月十五日の第三回貧民研究会の結論をもって、一応論争の幕を閉じるのである。因みに、貧民研究会はこの日をもって自然休会した模様である。

『日本の下層社会』執筆へ

労働者状態論争の発火点となった貧民研究会が一応の結論を得たことが報じられた七月を期にして、以後労働者状態論争は後段階に入る。

前段階において、貧民研究会、『労働世界』＝労働組合期成会・鉄工組合、そして横山源之助の三者連帯によってたたかわれた論争が、後段階にあっては横山源之助一人が代表する形でなおすすめられる。そして、後段階における論争継続とは、横山源之助にとっては、いよいよ『日本の下層社会』を執筆することと、労働者家庭アンケートの回収をまって、それを検証する作業であった。

横山源之助が『日本の下層社会』の執筆にとりかかったのは、この年明治三十一（一八九八）年九月からである。同書附録「日本の社会運動」の冒頭に、「余輩は本篇日本の下層社会の編輯に従事せるは、明治卅一年九月、第十三帝国議会は未だ開会せられざりし前なりき」とある。それは労働者状態論争途中、みずから主宰した貧民研究会が一端休会した後であった。しかも、『日本の下層社会』が書かれる目的は、論争の目的とまったく同じだったのである。すなわち労働者＝貧民の

生活はラクになっているから、労働運動、社会保障の必要はないという、一流警世家石川安次郎らに代表される「世の中の定論」に対して、労働者＝貧民の非人間的困窮状態を広域的、科学的、実証的にしめして、誰にもウソだとはいわせない、揺ぎのない、いふなれば万人が認めざるをえないものにする事だった。かつ、同時にそれは多大な資金援助をうけた、故佐久間貞一との約束である、わが国の貧民＝労働者状態研究の集大成作業に他ならなかった。その二つの目的が、いまここで、合致したのである。かくして、その歴史的书は目の前で進行しつつある労働運動の熱き日々の歩みと交叉しながら書かれて行くことになる。たとえば夜業廃止賛否論その他がこの書の各所に絡んであるように。

最終的には『日本の下層社会』そのものこそが、全頁を挙げて、労働者状態論争に対する決定的回答なのである。いま労働者状態論争と直接関係する箇所を巻中から拾うならば、一部はすでに見たように、何箇所もあるだろう。たとえば、石川安次郎が『毎日新聞』紙上に堂々と自説を披瀝した「貧民の実情」に対する反論を、同じ『毎日』紙上に載せた、横山源之助の「石川安次郎君に質す」中にある東京府下の職人労銀米価比較表以下の箇所が、『日本の下層社会』では、第二編「職人社会」第七「全国職人の平均賃銀」中に再掲された。あるいは、横山源之助が第二回貧民研究会報告のために、郷土富山県魚津の友人から取り寄せた、明治三十、三十一年北海道移住者統計を含む資料「四五反を耕作しつゝある小作人の生活現状如何」（『労働世界』第十二号雑録「地方貧民情況一斑」）は、同書第五編「小作人生活事情」第七「出稼、移住」中に再掲されたことも前に触れた。また、後述するように、回収された労働者家庭アンケートは、一部が『日本の下層社会』中に生かされていく。このように、労働者状態論争は後段階に到って、さらに徹底した形で、横山源之助畢生の大作『日本の下層社会』を書き上げる中でまず継続されたのである。

それなら、六月一日『労働世界』第十三号附録として発刊された、労働者一家の収入支出の決算表をもって活計の実情を募った家計アンケートの行方はどうなったか。次はその行方を尋ねてみなければならぬ順序であろう。その回収こそ、今度の論争の分水嶺であることは自明であるから。且又、数月のながい時間を待ってまでするアンケート調査という破天荒な方法の結果は論争の死命を制することになることは明らかであったから。さて、アンケートの回収結果は、横山源之助の二つの論文によって報告された。一つは『日本の下層社会』の中でもっとも尖鋭な箇所である、第四編「機械工場の労働者」中の第二章「鉄工場」。一つは雑誌『天地人』第十五～十六号、明治三十二（一八九九）年三、四月に掲載された「我國労働者の生計如何」である。両者は当然ながら姉妹篇をなす。

ところで、『日本の下層社会』は明治三十二（一八九九）年四月三十日教文館から発刊されるのであるが、この書が書き上げられた「明治三十一年十二月下旬」とある「例言」によれば、「第四編第二章鉄工場」は「十一月の調査」とある。これは家計アンケート回収時期とほぼ見合っている。そして第二章第五「生活統計」の段に、アメリカ（北米合衆国）、イギリス（大不列顛）、ベルギー（白耳義）、ドイツ（独逸）の労働者家庭との生計比較を統計をもって示し、欧米の労働者家庭が「日本の労働者が夢にだも知る能はざる書籍新聞料の如きを加へて、尚ほ収入総額に比して二十二倍十志余、家長賃銀を以て優に一家の生計を能くし居るなり」といい、これに較べて、日本では書籍どころか新聞購読料さえもなく、家長一人の稼ぎだけでは追いつかず、家族の内職に頼ってやっとかつかつの生計をたてている状態を、回収したアンケートの結果を集計しながら明かしている。

第五「生活統計」の中に、こうある。「嘗て労働新聞社の諸子は、労働者に檄して生活費用の概略を徴せることあり左に之に依じて返答し来りたる二三の表を掲げて読者の研究に資せん」と。そして、旋盤職、仕上職、小銃機関場職工、旋盤工の四つの例を挙げてある。労働新聞社とは『労働世界』発行所であることはことわるまでもない。そして、結語でこういつている。「総じて之を云へば、七十余の返答中、支出より収入額多きは僅に十幾ツにして、他は悉く支出に不足を訴へ居るが如し、父母あり、子供ありて他に収入なく、而して家長の賃銀七十銭以下なるは、概ね生活に不如意ならざるはなきなり。之を以て見れば、職工にして日に七十銭以上の収入あるか然らざれば独身なるか、然らざれば父母妻子に他の職業ありて生活を補ふことなければ、一に家長者の賃銀のみを以てしては到底一日の生活を能くする能はざるなり、而も日に七十銭以上の収入ある者、多数職工中果して幾割あるべきぞ（前節、第四賃銀参考）生活は人生の第一義なり、誰か言ふ労働は神聖なりと、若し単に生活の意味を以て見れば、日本の労働の如き生計だも支へ得ざる廉価にして品位なき労働は、決して形而上の意を含める神聖てふ文字を入れるべき余地あらざるなり、而して工業の発達を望み、社会の進歩を求めんとす、余輩は世人の言ふ所に疑惑を置くと共に、労働者自身も学者の空言に甘んじて得々たるを窃に怪しむなり。余を以て卑近なりとする莫れ、是れ寔に日本の実情也。知らず、労働者諸子は今日の状況に対して何等の覚悟やある。」と。

これに次いで、翌年発行の雑誌『天地人』（第十五～十六号、明治三十二年三月二日、四月二日）上の「我国労働者の生計如何」に、やはり生計費用の表が掲げられ、前者と同じように、つぎのような語が添えられてある。曰く「嘗て労働新聞社の諸子は労働者に檄して生活費用の概略を徴せることあり拙著日本の下層社会にも収められたるも更に其の後得たる二三の表を掲げて読者の研究に資せん」と。そして、旋盤職、製罐職、鑄造職、仕上職の四表が掲げられてある。その一つを、いま例にとってみよう。すなわち、公募されたわが国最初の労働者状態家計アンケートがどのような形式のものであったか知る手がかりになるから。

第四表 仕上職

家族	夫 三十二歳	妻 二十九歳	親 六十九歳	小児 二歳
給料	六十銭	一ヶ月労働日数廿七日		
労働時間	十時間			
雑収入	拾六円			
総収入	三十二円二十銭			
住宅間数	六畳一間	二畳一間		
家賃	壱円七十銭	肴 一円	石油	三十銭
米代	六円	酒 三円	髪結	三十六銭
薪炭	九十銭	味噌醤油 七十銭	湯銭	五十銭
蔬菜	一円	蓂 三十銭	小供小遣	四十銭
雑費	拾六円十六銭			
総支出	三十二円二十六銭			

明治三十一（一八九八）年六月十五日、『労働世界』第十三号附録として配布された、アンケート家計調査表は十一月までに七十余通回収され、さらにこれを追って、翌三十二（一八九九）年三月までになお数通が回答された。

すなわち、横山源之助は労働者状態論争の後段階において、大著『日本の下層社会』の執筆と、

二度にわたるアンケートの検証によって、論争を継続遂行した。それは『日本の下層社会』が刊行される、明治三十二（一八九九）年四月、同時に第二次アンケート集計を検証した「我國労働者の生計如何」が雑誌『天地人』第十五～十六号に同年三～四月に発表された時まで、実に一年余粘り強く続いたのである。このように、貧民研究会、『労働世界』誌上、労働者家庭アンケート発案・検証、そして『日本の下層社会』の執筆において、前、後段階を通じ、つねに論争の全局面で戦ったのは、横山源之助に他ならなかった。ひたすら、貧民の生活と労働戦線防衛のために。

むすびに

以上、忘れられた労働者状態論争の経緯と横山源之助の関連について述べてきた。それは、労働運動序幕期における、後の金井延ら労資協調路線対片山潜ら社会主義路線の対立抗争に劣らず注目されていていい論争であった。主題からいっても、極めて重い。遣われた方法論など劃期的であろう。それは決して横山源之助と石川安次郎との個人論争ではなく、序幕期労働運動が総力を上げてたたかった正統的防衛論争として、かつ経済学史上の特異な論争として記憶したい。また、当然ながら、『日本の下層社会』がそのときの論争を止揚し、鉄工等近代労働者のみならず、職人や、小作人や、日稼人足や、働くすべての者の生活を守るために書かれた、序幕期労働運動の活力がうみだした最高の連帯的な知的産物であったことも。

さて、昔の事ながら、私は『評伝横山源之助——底辺社会・文学・労働運動』（一九七九年）を書いた時、横山源之助が表に立つことを却けつつ、労働運動の発展のために尽瘁したことを、とくに『労働世界』を中心にしながら述べ、また貧民研究会との関係についてもできるかぎり明らかにした積りである。また最近まで知られることがなかったが、横山源之助が半如夢なる筆名で『労働世界』に載せた「労働小説」——明治三十一（一八九八）年二月日本鉄道機関方が待遇改善を要求して行い、勝利した、日本最初の鉄道ストの蹶起の模様を描いた「不平党」他——は労働文学系統の源流に位置するものであり、そのような文学史上における貢献も、序幕期労働運動との熱いかかわりがなかったならばうまれなかったものであろう（『大原社会問題研究所雑誌』第五七九号二〇〇七年二月号拙文「黎明期労働運動と近代文学—横山源之助と岸上克巳」）。

そして、誰よりも弱者のために生き、労働問題の解決をもって一生の仕事として止まなかった横山源之助という稀有な歴史の検証者の魂が、前にも述べたように、労働運動という人間の尊厳の解放運動に無縁であるはずがなく、同時代に三人で手をとり合った、高野房太郎や片山潜が労働運動の生みの親、育ての親と称えられるなら、つねに裏方的論証役に徹した横山源之助はどう呼ばれるべきであろうか。それは、やはり最大の知的貢献者として称えられるべきであろう。貢献が抽象なるが故に、忘れられたのであろうか。「労働運動醗酵の時」に、高野房太郎と片山潜が、関西地方の工場・労働調査を了えて、言葉をかえていえば、産業革命の様相を検べつくして帰京した横山源之助をさっそく迎え入れたのは、まさに労働問題における案内者としての知的貢献のためにちがひなかった。横山源之助はその囑望にこれ以上はないほどに答えていたというべきであろう。

さいごになったが、石川安次郎は明治三十一（一八九八）年五月四日、友人島田三郎社長の『毎

日新聞』に「貧民の実情」を載せ、労働者状態論争の火を全面的にひろげた。その翌月、なんと、件の『毎日新聞』の主筆に就任した。すなわち、『毎日新聞』記者横山源之助は論敵石川安次郎を上司に迎えながら、なお論敵として攻撃の手をやすめなかったことになる。そして、労働者状態論争の集大成といっても過言ではない『日本の下層社会』を、翌明治三十二（一八九九）年四月刊行し、翌月五月現下の労働問題を詳述し、労働運動の今後の進路を教唆する『内地雑居後の日本』を『労働世界』の発行所労働新聞社（社主片山潜）の要請で書き降ろし、社会叢書の一冊として版行した後、同年八月横山源之助は明治二十七（一八九四）年十二月日清戦争最中から記者として働いてきた『毎日新聞』社を突然辞めて、郷里富山県魚津に倒れるように隠棲する。畢生の大作『日本の下層社会』を書き上げるなど、大概をなし了えた後とはいえ、こうして、想いもよらぬ事態をむかえるのも、あるいは、社内における行き違いの空気や、微妙な感情的不和や、不快やに少なからずもとづくのかもしれない。その主筆石川安次郎が信州から伴ってきた木下尚江とは、木下尚江を労働運動の場へ手引きしたり、片山潜に会わせたりして、僚友として馬が合ったけれども。

ところで、石川安次郎側から、その後応戦があったか否か。遺憾ながら、浅学菲才にして、私は知らない。ご存知の方があればおおしえねがいたい。

だが、かんがえてみれば、石川安次郎は「世の中の定論」の先陣を切って、勇気をもって声を上げたのである。すぐに猛烈な反撃をくらったけれども。しかしながら、それで果して、「世の中の定論」は口を緘しただろうか。その反証であるかのように、一、二年にして、治安警察法の施行のためとはいえ、序幕期労働運動はもろくも潰えている。そして、そのとき、石川安次郎の口を通して、ときたま吐かれた“戦争は儲かる”，“戦後はラクになる”という金言は、その後の日本の百年を脈々と生き、現代にも巖然と生きているだろう。

さて、このように、労働運動の夜明のときにあった労働者状態論争は起きるべくして起きた。実は戦争と平和をめぐる論争であり、戦争経済論争であった。それはこの上もない歴史の教訓であろう。そして書かれた横山源之助の『日本の下層社会』が今日もなお初期労働者状態の古典として輝いてあるのは、その普遍的歴史的試練をよくたたかいぬき乗り越えることができたからにちがいない。それこそが古典の生命であるから。

（たちばな・ゆういち 元法政大学大原社会問題研究所所員，横山源之助研究家）